

論壇

伊藤 元重

滅菌状態の中の日本人

若い頃、イザヤ・ベンダサンという人の『日本人とユダヤ人』という本を読んだ。その冒頭にある次のような記述が強い印象に残っている。「日本人は水と安全がただだと思っ

ている」、という記述だ。治安がよい日本では当時、安全は当たり前であると考えられていた。

水にしても、水道の蛇口をひねればきれいな水が出てくる。当時は水道の水を飲むのが当たり前であり、今のようにおいしい水を求めてミネラルウォーターを購入することなどま

ずなかった。しかし、世界的にみれば、「水も安全もただ」であるところは少ない。それは当時も今も同じである。

私の個人的な体験としては、米国留学したとき、はじめて「安全はタダではなご」(このことを実感した。私が留学した一九七〇年代の米国は今よりもはるかに治安が悪かった。麻薬常習者の拳銃による強盗なども

しばしば話題になった。

渡米したとき、最初に周囲の日本人から教えてもらったことは、とにかくポケットに二十ドル札を入れておくようにということだった。拳銃を突き付けられたときにそれを出せばよいというのだ。少なすぎても、多すぎてもいけない。少なければ麻薬が買えないので撃たれてしまうし、

危険回避、国任せはだめ

多ければこれまた殺される危険があるというのだ。強盗への予防としては、あまりお金がないけれど最低限のお金だけ持っていると思っ

てもらうのがベストだということだ。最初はどうした話を聞いて、米国

はなんてひどい国かと思ったりもしたものだ。しかし、その後、仕事で世界のいろいろな所に行く中で、「安全はタダではない」ことが世界標準であることを知った。重要なこととは、危険に遭遇しないように、自分の身は自分で守るよう

に心掛けることだ。ちなみに、今の米国は治安がずいぶん良くなった。残念ながら、それに反して、最近の日本では治安の悪化への不安が増している。

日本は素晴らしい国である。治安も水もタダとは言わないまでも、それでもかなり質の高さを維持している。それはそれで素晴らしいことだが、その結果、日本人の危険への防御姿勢があまりにも弱くなっていないだろうか。ちょうど、滅菌状態に近い中

に似ている。東南アジアに在住する日本人の家に招待された日本からの出張者が、その家と同じように刺身を食べ、出張者だけ病気になるという話をたまに聞く。現地にいる人は病気に対する抵抗ができていて、病「清潔な」日本から来た出張者は病原菌に抵抗力を持っていないのだから。

あり得ない100%の安全

今、問題になっている冷凍餃子の事件もそうした視点から見ると必要が

ある。もちろん、農薬の混入があったことは許されることではない。しかし、毎日一億人を超える数の日本人が、便利な冷凍食品や加工食品を大量に消費していれば、それが一〇〇%安全であるということはありません。政府がどれだけ安全規制を強めたとしても、規制だけで安全が確保できるわけがない。

グローバル化が進んでいくほど、一人ひとりの日本人がリスクを避ける能力を身につける必要がある。安全な食の確保についても、他人任せや政府任せにしないで、自分で努力する姿勢が必要だ。そしてこの危険への対応は食の問題だけではない。グローバル化は、いろいろな危険を日本に持ち込む。犯罪から病気まで、麻薬のような社会悪から環境破壊まで、実に多様なものが持ち込まれてくる。そうしたグローバル化の負の部分から国民をいかに守るのかということは政府の重要な役割ではあるが、政府に頼りきった「弱い国民」では守りようがないだろう。

(総合研究開発機構
理事長・東大教授)

*この記事は、静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。